

ノックをしても返事がない。引き戸を静かに開けると、ベッドへ起き上がり窓の外を眺めている浴衣の小さな背中が見えて、胸の奥がやるせなく疼いた。

「須藤先生、高嶺真澄です。お邪魔します」

ベッドの脇へ近付き、身を屈める。皺だらけになった教授の横顔がゆっくりとこちらへ向いた。

「先生、ご無沙汰しています。真澄です。覚えておいでですか？」

薄く白濁した右目が細かく左右に動き、じきに驚愕と喜びの表情を顔いっぱい浮かべた。

「高嶺くんじゃないか！ 何ということだ！ 元気にしていたのかい？ さあ、座りたまえ」

スイッチが入ったようにテキパキと動き出し、真澄にパイプ椅子を進めてくる。真澄は持参した菓子を冷蔵庫へしまい、腰を下ろした。

「山梨はどうだい？ ここへ戻りたくなつたのならいつでも戻ってきなさい。遠慮しないでいいのだよ」

至極嬉しそうに頷く教授の前に、真澄は微笑んだ。

「思っていたよりもお元気そうで安心しました。僕は山梨を離れ、今は伊豆大島にいるのです。町の診療所のお手伝いをしています」

「おお！」

教授は目を大きく見開き、しばらくそのまま真澄の顔を見つめた。次第に表情が失われていく。真澄はそつと手を伸ばし教授の首筋に触れた。眼振を見るが異状はない。脈拍も正常だった。様子を見てみると、教授はそれまでとは打って変わって低く轟くような声で呟いた。

「伊豆大島かね」

「は、い」

「白亜の館が十六夜月に照らされる晩、水面を見つめる頭蓋骨が浮上する」

真澄は教授の顔を凝視した。白亜の館。診療所のことには違いなかった。

「そこを通る方舟は沈み、無数の魂の欠片が光の帯となって、不帰の客を導く」

「先生、それはどういう意味ですか？」

須藤教授にそう問いかげながら、真澄は脳髓の奥がひりひりする感覚を覚えていた。何かの記憶が、もしくは記憶の貯蔵庫が破裂しそうだ。今まで思い出せなかった肝心な部分。それさえ判れば、すべてが繋がるという期待と予感。

教授は真澄を凝視したまま答えなかった。瞬きを二回したあとは目を閉じてしまう。真澄は教授の身体を支え、ゆっくりとベッドへ横たえた。骨と皮だけになった背中が痛々しかった。全盛期の頃は背が高く胸板の厚いスポーツマンだったことを思い出し、真澄は再び切ない思いがした。

「いつだったか、きみのことを訪ねていった青年がいたよ」

タオルケットを教授の肩へ掛けていた真澄の両手が止まった。

「名前は？ 名前は言っていましたか？」

「うーん……」

教授は目を瞑ったまま眉根を寄せて考え込んだ。真澄はもどかしい思いで続きを待った。

「焔を纏った青年だった」

脳裡に何かが点り、それは次第にあの夢の中の彼へと重なっていった。

「背が高く瘦身で、緩やかなウェーブのかかった涅槃色の髪の色をしていましたか？」

「その通りだ！」

教授はカッと両目を見開いた。

「深海を投影するような昏い瞳をしていた。その奥に時折熾火のように青白い焔が躍るのだよ。美しい青年だった」  
夢の中の彼に間違いない。ああ、やっぱり俺を探してくれていたんだ！

「研究室の皆で撮った昔の写真を持たせてやった。青年は、目に薄っすらと涙を浮かべてきみの顔を見つめていたよ」

「先生……その彼は名乗りませんでしたか？」

「法学部出身と言っていた……名前も聞いたはずなのだが失念してしまった」

枯木のような両手で力なく顔を覆う。無理もない。真澄は教授の肩へ優しく触れた。

「いいんです先生、貴重なお話を伺えて何よりです。どうかご無理なさらず」

「あの八重桜が呼んだのだよ」

のっぺりとした声が指の間から漏れてきて、真澄は思わず動きを止めた。

「桜が咲くと、人が死ぬ。次は、あなたの番」

須藤教授はそう呟いた後、穏やかな寝息を立て始めた。真澄は教授の手を顔から下ろしてやり、首を少し傾げてその寝顔を見つめた。桜が咲くと、人が死ぬ。どこかで聞いた言葉だった。何か重大なことが起こったのではなかったか。自分に非常に近い存在の誰かが命を落とした場所。それは、あの夢の中の彼と何度も落ち合った神社ではなかったか。

激しく揉み合う誰か。短い悲鳴。そして、銃声。顔れていく両脚。背中を瞬時に濡らしていくどす黒い血。駆け寄っていく誰か。それを陰から見ている自分。突然襲ってきた、破られるような心臓の痛み。

教授の病室を出て、真澄は廊下を歩き出した。途中左側に医局が見えて、無意識に中を覗いたが誰も見当たらなかった。懐かしいような、そうではないような不思議な感覚に囚われていると、ふと香の匂いが漂い、真澄はその場に立ち止まった。どこかで嗅いだことのある香り。目を閉じると鞠の形をした薫炉が緩やかに転がる様子が見えた。長い一枚板の廊下。隅々まで丁寧に磨き上げるのが仕事だった。誰の？ 幼かった自分の。檜の良い香り。母親を早くに亡くし、警察官の父親と二人きりだった――

真澄はゆっくりと顔を上げた。これは今生の記憶ではない。

高校の入学式。机を並べた学生は俺の顔を見るなり目を大きく見開いたものだった。やがて美しい微笑を浮かべこちらの手をするりと握り、顔を赤らめながらこう言ったのだ。

「きみのその手の美しさは反則だ」

自己紹介はその後だった。

「アサクラセイゴ。よろしく」

誠吾。

誠吾。

誠吾。